

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

【表紙】

作品タイトル

「伝説のデバッガー『眠りのケン』」

サブタイトル

「Undelivered Message」

鎌田勝浩 作

（かまだかつひろ）

原稿枚数 26枚 / 2000字詰め原稿用紙換算

78枚 ≡ 20文字 × 775行（本、次頁含まず）

電子メール kamada@killi.co.jp

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

伝説のデバッガー『眠りのケン』

Undelivered message

脚本 鎌田勝浩

登場人物  
山田健治（やまだけんじ・28）  
中山満里恵（ななかやままりえ・30）  
オヤジさん  
ウルズ  
スクルド  
ベルザンデイ  
篠原慎太郎（しのはらしんたろう・38）  
林文彦（はやしふみひこ・25）  
広瀬美由紀（ひろせみゆき・23）



伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

男 う  
男 の声「そうそれだ」  
女 の声「そして、噂では、寝ている間に仕事  
を済ませてくださいとうとか」  
男 の声「そうそう。そこで、ついたあだ名が」  
女 の声「眠りのケン」  
「タイトル」  
山田の事務所（夕方）  
アパートの一室の事務所。事務機に座つ  
て中山満里恵が事務を執っている。  
机の電話のベルが鳴る  
中山「（受話器を取って）はい、山田技術研究  
所です」  
扉を開けて、山田が入ってくる  
山田「戻りましたあ。あゝあ、疲れた疲れた。  
（猫なで声で）満里恵さん、済まないけど、  
コーヒードでも入れてくれないかな」  
中山「（受話器に手を当てて小声で）今、電話  
中よ。静かにしてっ（電話に戻ってメモを  
取りながら）失礼しました。はい、はい……」  
山田、肩をすくめ、荷物を置いたあと、  
台所へ  
中山「はい、わかりました。では、よろしく  
お願いします（受話器を置く）」  
山田、マグカップを手に、出てくる  
中山「立ったまま、コーヒをすす  
るんだけど。折角近所の仕事だったんだ

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

から、夜くらい、戻って来れないの？ 全く」

山田「（コーヒーを飲み込んで）ん、すいませ  
ん。技術屋なもんで、調子が乗ってくると、  
一気に片付けたくなる性分なんですよ」

中山「（あきれて）本当にもう、困ったもんね、  
エンジンアって」

山田「それはそうと、今の電話、何だったの？  
（少し嫌そうに）また、仕事の依頼？」

中山「（不機嫌に）なによ、嫌そうに」

山田「（遠慮気味に）いや、このところ仕事ば  
っかりだったから、この辺で少し、休みた  
いかな〜と」

中山「（不機嫌に）山田君、どれだけ借金があ  
ると思ってるの。（一転笑顔で）借金が返せ  
るまではキツチリ働いてもらわないと、困  
るんだけどっ」

山田「（諦めて）はいはい、キツチリ働かせて  
もらいますっ」

中山「（笑顔で）素直でよろしい」

山田「で、依頼って？」

中山「そうそう、依頼の話ね。ドリームウエ  
ア社って知ってる？ 新興のゲーム会社」

山田「ああ、知ってる知ってる。最近頑張っ  
ているゲーム会社だよな」

中山「開発中の新しいゲーム、『モンスターバ  
スターズ』ってのがあるそうなんだけど、  
どうもこれがバグって、このデバッグ  
が今回の依頼みたい」

山田「ゲームソフトか。ゲームはちよつと苦  
手なんだけどな」

中山「賢沢言わない。君なら大丈夫。出来るよね（笑顔）」

山田「（諦めて）全く、その笑顔には敵わんな。仕方ない、やりましょう」

中山「（笑顔で）じゃ、明日の仕事の前に、今夜は久しぶりにごちそうでも作っちゃおうかなつ。ちよつと買い物に行つてくるね」

山田「（驚いて）えっ、明日なの？少しは休ませてよつ」

山田「事務所を出て行く中山を見送つて」

山田「全く、人使いが荒いんだから」

山田「依頼先 中会議室（朝）」

山田「中会議室。山田とドリムウェア社の社員2人が、相対して打ち合わせ中」

林「と、というのが、このゲームの概要です」

山田「ええと、要するに、3Dバーチャル空間で銃を撃ちまくる、リアルタイムRPGのなわけですね」

篠原「（嫌そうに咳払いして）じゃ、林君、問題点の方、説明してくれるかな」

林「（頷いて）はい、部長。では、問題点、バグの方について、説明します」

山田「（N）」「要するに、予期しないところに、一見、雑魚キャラに見えるバグキャラが現れ、しかもそれはいくらか攻撃しても倒せない、無敵キャラらしい。確かにこれじゃ、ゲームにはならないな。そして、バグキャラの出現条件は、はつきりしないらしい。でも出現するのは比較的簡単なようだ」

山田「再現しやすいなら、原因を特定できそ

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

うなものです。が……」

林 「（少し不機嫌そうに）ですから、出現条件の特定が出来ないんです。同じ操作をしても、必ず出現する訳ではないようなんです。怪しそうな部分のソースを見て、問題はなさそうですし……」

篠原 「（咳払いをして）だから君を呼んだ訳だよ。ここだけの話、このバグのおかげで、発売が当初予定から3ヶ月も遅れてしまっている。もうこれ以上、遅らせる訳にはいかないんだ。何とかしてほしい。」

林 「（不審そうに）本当に、1週間やそこらでデバッグが出来るか？うちのチームで3ヶ月掛かってダメだったのに見てみない？」

山田 「正確なところは、ソースを見てみない？」

篠原 「大丈夫です。」

山田 「（少し不機嫌そうに）うちの社運がかかっているんだ。何とかしてもらわないと、困るんだよ。本当に頼むよ。」

山田 「分かりました。任せてください。」

篠原 「（少し不機嫌そうに）小会議室（朝）にいくつかのコンピュータ、モニタ類が設置されている。用意させておいた。これでいいかね。」

山田 「（辺りを見回して）そうですね。はい、大丈夫だと思います。」

篠原 「そうか。では、よろしくお願いします。」

林君、あとは頼むよ。」





伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

山田　　で　　体　　山田　　林　　篠　　林　　篠　　林  
 ー　何　デ　レ　山　デ　置　も　頭　ー　傍　紙　山　依　ー　な　ー　す　ー　頼　ー　丈　ー　部　つ　ト　業　数　依  
 ベ　人　も　バ　イ　田　イ　い　拝　に　な　ら　フ　田　頼　分　い　仕　か　だ　り　信　夫　篠　長　て　の　し　人　頼  
 ル　、　な　ッ　画　の　ス　て　あ　せ　入　る　の　ア　、　先　か　だ　ろ　鶴　ど　ん　る　ん　で　原　席　い　床　て　い　の　社  
 ザ　ぼ　い　グ　面　見　プ　あ　る　た　ど　コ　ー　ル　屋　小　て　う　引　の　、　だ　し　か　か　す　、　前　々　、　寝　別　コ　室  
 ン　つ　空　飯　が　た　目　イ　片　も　ぞ　、　ヒ　ー　見　一　議　す　林　君　、　、　覗　条　件　あ　る　ま　い　し　、　何　な　ん  
 デ　ん　間　空　想　モ　ニ　、　を　目　ら　い　ま　し　よ　う　か　、　問　題　の　ソ　ー　ス　大  
 イ　と　が　空　間　タ　画　面　に　重　な　っ　て　見　え　；  
 、　起　動　！　ー　、　山　田　が

山田　　で　　体　　山田　　林　　篠　　林　　篠　　林  
 ー　何　デ　レ　山　デ　置　も　頭　ー　傍　紙　山　依　ー　な　ー　す　ー　頼　ー　丈　ー　部　つ　ト　業　数　依  
 ベ　人　も　バ　イ　田　イ　い　拝　に　な　ら　フ　田　頼　分　い　仕　か　だ　り　信　夫　篠　長　て　の　し　人　頼  
 ル　、　な　ッ　画　面　見　プ　あ　る　た　ど　コ　ー　ル　屋　小　て　う　引　の　、　だ　し　か　か　す　、　前　々　、　寝　別　コ　室  
 ザ　ぼ　い　グ　面　が　た　目　イ　片　も　ぞ　、　ヒ　ー　見　一　議　す　林　君　、　、　覗　条　件　あ　る　ま　い　し　、　何　な　ん  
 ン　つ　空　飯　が　た　目　イ　片　も　ぞ　、　ヒ　ー　見　一　議　す　林　君　、　、　覗　条　件　あ　る　ま　い　し　、　何　な　ん  
 デ　ん　間　空　想　モ　ニ　、　を　目　ら　い　ま　し　よ　う　か　、　問　題　の　ソ　ー　ス　大  
 イ　と　が　空　間　タ　画　面　に　重　な　っ　て　見　え　；  
 、　起　動　！　ー　、　山　田　が



伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

想気山 お少か山ニ山依笑 ッよ 山 山 山  
 空が田 もしから田タ田頼顔 はろ 山 山 山 山  
 間つ の む整外 へ、 画、 薄、 小、 輝、 たい、 ス、 と、 消、 える  
 とく 夢 ろ理して机 ドを見つめに一人、 机に座ってモ  
 同じ、 界 うつ場所をあけ、 あくびをし、  
 よう 山 は先ほどのデバ ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、  
 うな 田 は先ほどのデバ ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、  
 世界 ほど ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、  
 の どの デバ ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、  
 中に いた、 グ ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、  
 輪 飯 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、 ン、

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

小人達が数十人、現れる  
 オヤジさん、出てこい！  
 声 ヤジ、おーい、野郎ども、出てこい！  
 山田「あ、りがとうございます。よろしくお願  
 せなさい（胸を叩く）」  
 悪気はないわな。よし、分かった。任  
 オヤジ（咳払い）ま、そこまで頼られちゃ、  
 さだけが頼りなんですから」  
 比ベ物になりませんよ。（哀願して）オヤジ  
 バツグ支援プログラムで、オヤジさんは  
 山田「勤弁しなくてくださいよ。あれは単なるデ  
 な老いぼれなんか頼めば良からう。こん  
 神さん達、彼女から頼めば良からう。こ  
 んて言ったかなあ、ほれ、お前の作った女  
 オヤジさん「またお願いか。（皮肉っぽく）な  
 れませんか。お願いします。また、力を貸してく  
 山田「職人の肌風体をだっした。西洋の鍛冶  
 声 「背後から！」誰かと思えばまたお前か  
 山田「周りを回り見回して、ため息が、少し違  
 郭がぼんやりして、いたる点が、少し違  
 くん「オヤジさん、どこですか？」出てきて

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

オヤジ「野郎ども、仕事だ。抜かるなよ。(ひ  
 と呼吸置いて) かかれ！」  
 声  
 小人達、一斉に、空間に浮かんだプログ  
 ラムの化身であるドミノ状に配置した物  
 体に飛び込み、それぞれ格闘を始める  
 最初、全体が薄いグレイドだった物体が、  
 だんだん白い部分が増えていく。同時に  
 残りの部分の色が濃くなる。やがて真っ  
 黒なある一カ所付近を除いて全体が真っ  
 白になつた  
 小人達が戻つてくる  
 オヤジさん「どうやら、終わつたようだな」  
 吸つていたキセルの灰を落として立ち上  
 がる  
 山田「分かつたんですか？」  
 オヤジ「まあ、待て」  
 小人達の声(ガヤ)  
 オヤジ「そうか、分かつた。ご苦労だったな。  
 解散！」  
 小人達、何処へか去つていく  
 山田「オヤジさん」  
 オヤジ「大体分かつた。(キセルで物体の黒い  
 部分を指して)あのあたりが怪しいようだ。  
 あの辺を重点的に調べてみるがよからう」  
 山田「やっぱり、あの辺なんですな」  
 オヤジ「だが、少し気になる事もある」  
 山田「気になる事？」  
 オヤジ「うむ、どうやらこれはバグじゃなさ  
 そうだ」

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

林 (M)「ちょっと覗いてみよう。なに、平気  
 っているんだから。少し考えて  
 な？覗くならって言ったが、一体、何をや  
 林 (M)「あの山田って奴、大丈夫なんだろう  
 進行方向に向き直して歩き出す  
 林 声「あ、林チーフ、お先に失礼します」  
 議室に向かって歩いている  
 林、薄暗い廊下を、山田が作業中の小会  
 依頼先廊下の仕事だらと良からうらあ  
 はお前さんの仕事をつけると良からうらあ  
 オ ヤジさんの点に気がつけると良からうらあ  
 から探して見つからなかつたのな  
 山 田「なるほどら。それでいくら怪しそうな  
 な、プログラマらとしからないし、意図的  
 探そうらても見つからない。バグを  
 それは不明だが、いきずにしても、バグを  
 オ ヤジ「悪意なのか、あるいは善意なか、  
 山 田「だらな、バグではないとして、  
 オ ヤジ「そうらだら、どうもこれは意図して組込  
 山 田「はいら。では、バグじゃないという事は  
 ム上の欠陥の事だら。バグじゃないという事は  
 ラマらが意図しせずに、紛れ込んだプログララ  
 オ ヤジ「そもそも、バグという事はですから？」  
 山 田「バグじゃないという事は、プログララ

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

だよー  
ドアノブに手をかけて回してみる  
林（M）「えっ、開いてる？ 不用心だな」  
ドアノブを回し、そっと開きかける  
林（M）「気付かれないように、そーっと……」  
て、おいおい、自分の会社で何やってんだ  
かー  
ドアを少し開けて、中を覗き込む  
林（M）「どれどれ……」  
山田が、起動中のコンピュータ類の前で、  
会議机にうつ伏せで眠っている  
林（M）「おいおい、何だあいつ、寝てるぞ！  
何をしているかと思ったら、全く……。早速  
明日、部長に報告しないとイケないな」  
そつとドアを閉めて  
林（M）「くだらない！ さっさと帰ろう！」  
林、立ち去る  
依頼先 小会議室（夜）  
山田、モニターの光だけの薄暗い部屋で、  
会議机にうつ伏せで眠っている  
山田、目を覚まして上体を起こす  
山田「ん。なんだ？（伸びをしながらん）、  
良く寝た」  
薄暗い周りを見回して  
山田「そうか、もう夜か」  
立ち上がって、部屋の電気を付ける  
席に戻って  
山田「さて、忘れないうちに、一気に片付け  
てしまいますか」  
デバッグ仮想空間

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

山田「先ほどと同じように、プログラムのソースが展開されている」

山田「ベル、ウルズ、スクルド、起動！」

ベル「姿になる」

山田「（3人を見回して）よし、いよいよ実機によるテストラン、およびデバッグを行う。」

山田「（3人を見回して）よし、いよいよ実機によるテストラン、およびデバッグを行う。」

ベル「ウルズ、スクルド、呼びですか、マスター（へと、笑顔を見せる）」

山田「（N）彼女達は、俺が作ったデバッグ支援プログラムの過去、未来、現在を司る北欧神話の女神にちなみ、ウルズ、スクルド、ベルザンデイと名付けた。プログラムを実行する時に遡って調べたり、直すの状況を調べたり、分析したりするベルザンデイ。強力な武器だ」

山田「よし、まずベル、デバッグビルドしたオプジェクトをターゲットにロードして、デバッグ起動。それから、ゲーム画面を表示して、情報画面をオーバーラップ表示だ」

ベル「はい、マスター」

山田「画面が、3D表示のゲーム画面に変わる。別に、デバッグ用の情報画面が半透明のスクリーンとして表示される」

山田「よし、それでは第13ステージから」





伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

山田「（驚いて）ベル、M203アーグレネードラ  
ンチャー用意。俺のM19A2に装備しろ。」  
スクルド「前方の空洞から敵弾多数、来ます。  
到着まであと5秒。隠れてっ！」  
山田「慌てて岩の陰に隠れる。やがて、  
銃弾の雨が襲来し、女神達を貫く。が、  
そのまま突き抜け、何事もない。  
スクルド「警告。敵多数、こちらに突撃して  
きます。視認まで15秒。」  
山田「うわーっ。グレネードランチャー連続  
発射！」  
山田「洞窟奥の空洞内へ、何度も再充填  
しつづけてパラメーター、急激に変動中。異  
常事態です。」  
スクルド「空洞内、敵反応少数。ひとまず危  
機は脱したようですよ。近いや、何か変です！  
と、あえず、入り口付近には敵反応はあり  
ません。敵の動き、緩慢です。」  
山田「じゃ、突入するぞ！」  
ウルズ「大丈夫です。マスター。」  
山田「来てるか？」  
山田「（拍子抜けして）こんなところに、ゾン  
ビ？」  
ベル「気をつけてください。あのゾンビは普  
通、うごめいていた。ただのゾンビが3  
空洞内を覗き込むと、ただのゾンビが3  
体、うごめいていた。」





伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

ウルズ、この時点まで戻って、再度起動。  
 指示があるまでステツプ動作。画面表示は  
 メインをソース表示にして、ゲーム画面は  
 サブに移動。よし、いくぞっ！

依頼先小会議室（夜）  
 客観視点に戻る。山田が、ヘッドマウン  
 トディスプレイを装着してモニタ画面を  
 見ながら、キーボード操作している

山田「そうか、ここか。これが問題なんだな」

山田「せながら、眺めている  
 キー操作してソース画面をスクロールさ  
 う事だったのか？」  
 依頼先開発室（朝）

声  
 山田「えっ、何だこれは？　そうか、そうい  
 りの人はいなかつたらしい。昨晚は泊ま  
 りを開けて、篠原が入ってくる  
 篠原「篠原部長、おはようございます」

林「それを認めて林が、篠原に走り寄って  
 ちよつとお話があるんですが」

篠原「おはよう、林君。朝っぱらから何だね」

林「あの、昨日来た、山田の事なんですが」

篠原「山田？　ああ、あの山田君ね。それがど  
 うしたんだ？　まさか林君。君、覗いたんじ  
 や？」

林「（遮って）はい、気になったんで、昨日、

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

山田「はい、私もちょうど、篠原さんや林さ  
 さず、林が何か言おうとするが、その前にすか  
 作業の進み具合はどうだい？」  
 林が君に話があるそうなんだが、  
 篠原「済まないね、山田君。ちよつとうちの  
 さい」  
 山田「（振り向いて）わっ、驚かさないでくだ  
 山田、会議机の席に座っている  
 開き、林と篠原が入ってきて、突然扉が  
 ドアの外ががやがやして来て、  
 依頼先小会議室（朝）  
 引つ張らないでくれたまえ」  
 篠原「分かった、分かったから林君。そんな  
 林「一緒に来てください。早くっ！」  
 え」  
 篠原「まあ、まあ。林君、少し落ち着きたま  
 う」  
 ましように。行って、とつちめてやりましよ  
 な奴に任せたのが間違いでした。すぐ行き  
 林「仕事もしないで寝てたんですよ。あんな  
 篠原「何か気がついた風で」ふーん、そうか」  
 林「仕事もしないで」  
 林「それが、何とあいつ、寝てたんです。  
 篠原「何が見えたんだい？」  
 林「そしたら、何が見えたと思います？」  
 篠原「（呆れて）おいおい。それで」  
 篠原「（呆れて）おいおい。それで」  
 帰る前にちよつと覗いてみたんです」

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

んをお呼びしようと思っていたところでした。林「えっ？」

山田「実は、たった今、テストが終わって、動作確認が出来たところです。(笑顔で)問題は解決しました」

林「(激高して)ちょっと待てよ。1週間どころか、まだ昨日の今日だぜ！なに寝言を言っているんだ！」

篠原「まあまあ、林君。落ち着きなさい。(山田の方を向いて)そうか、終わりましたか。やはりね！」

林「どういう事ですか、部長！」

篠原「まあまあ、まずは山田君の話聞きましょう」

林「(少し落ち着いて)：わかりました」

山田「(遠慮がちに)あのー。お話ししても、よろしいですか？」

篠原「そうだな。それでは、場所を変えてお話し願いましたよ」

山田「分かりました。それでは、まず、ここにソースと、新しいオブジェクトが置いてありますので、そちらでも確認していただけますか？(と、メモを渡す)」

篠原「(渡されたメモを林に渡して)じゃあ、林君、テスターを何人が集めて、動作確認を頼んでおいてくれ」

林「(メモを受け取って)分かりました」

林、部屋の電話を取って、何か話し始める

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

山田「はい。どうも。バグというより、厳密にはち  
 林「え、バグじゃないんですか？」  
 山田「今回のバグですが、実はこれ、厳密に  
 山田「いきまう事なんですか。それで合点  
 山田「：そので、かなりました。前、不慮の  
 交通事故で亡くなりました。前、不慮の  
 た。残念な事に、4ヶ月ほど前に、不慮の  
 林君に次ぐ位の、優秀なプログラマーでし  
 篠原「（頷いて）はい、彼女は社内でも、この  
 山田「メインプログラマー、だった？」  
 山田「だっ、た、広瀬美由紀です。それが何か？」  
 林「みゆなら、多分、彼女のニツクネー  
 ムだと思えます。うちのメインプログラマ  
 は、つとして篠原、林、顔を見合わせて  
 す。が、ご存じないでしょう。か、と思いま  
 イ・ユウ、みゆ、つて読むんだと思いま  
 だと思っ、呼吸置いて、多分、ニツクネーム、  
 山田「（ひと呼吸置いて）多分、ニツクネーム、  
 篠原「構わないよ。なんだい？」  
 山田「は、い、その事なんです。その前に、  
 一、つ、お聞きしたい事があるんですが、よ  
 ね？」  
 篠原「で、結局バグの原因は何だったんだ  
 昨日と同じような配置、位置関係。  
 依頼先 中会議室（昼）





伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

篠原「扉が閉まる  
 がとう。ご苦労様」  
 山田「はい、安心してました」  
 林「（立ち上がった）あの、大丈夫そうなの  
 で、私はこれで退出してもよろしいでしょ  
 うか」  
 篠原「特に、問題が無ければ、構わないが……」  
 林「では、私はこれで、失礼します」  
 林「慌ただしく退出する  
 依頼先（玄関前（昼））  
 山田「では、これで失礼します。また、何か  
 ありましたら、よろしく願います」  
 篠原が見送る前で、山田、一礼して玄関  
 を出る  
 依頼先（開発室（昼））  
 林の席のコンピュータに向かいデイ  
 スプレイを見つめて作業をしている  
 なかつた。これか。：何でこれに気付か  
 さらには！操作を続ける  
 林「これは何だ？「キャ」なのか？」  
 見つけた「キャ」にアクセスする  
 画面に広瀬の顔の映像が映し出される  
 広瀬「あ、林チーフ。林チーフですよ。こ  
 れを見ているという事は、私のメッセー  
 ジ、読めたんだですね。（笑顔で）さすがはチ  
 ーフですね」  
 画面を見つめる林。広瀬の声を聞きつけ、  
 周りに他の社員も集まってくる

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

篠原（オート）「林、お前が見つけた画面を見続けると、林  
映像の再生が終わった画面を見続けると、林  
る）「画面に手を伸ばして映像が切れ  
シマイツ（画面に手を伸ばして映像が切れ  
束ですよ。待ってます。広瀬でさいな。オ  
付いた。私に声をかけてください。ね。約  
ます。これを見たら、プロジェクトが片  
広瀬「林先輩、見つけてくれるって、信じて  
目を戻す。林先輩、見つけてくれるって、信じて  
篠原に気づく。篠原は頷く。林、画面に  
手を置く。林、それに気づいて、林の肩に  
林の後ろに、篠原が来ていて、林の肩に  
言っちゃった。訳ですけど。って、もう  
つけられたら、言おうって。先輩がこれを見  
つて、賭けな泣く音が聞こえる  
瀬「周りが騒ぐ音。先輩がこれを見  
か。キャー、言っちゃったあ  
：あの、アタシとデートしてもらえませんか  
プロジェクトが片付いて、全部終わったら、  
瀬「（恥ずかしがって）あの、林先輩。この  
林、画面を見ている目が潤んでくる  
なに言ってるんだか。馬鹿だなあ、アタシ  
は、その必要がなかったってことですよ。  
きますから。って、これを見てるってこと  
くても、納期前にはちゃんと戻してお  
瀬「あ、大丈夫ですよ。万一見つけられな  
こんな小細工、しちゃいました。ちよつと  
へためらつて、恥ずかしいから、ちよつと  
瀬「実は、チーフに言いたい事があって、

伝説のデバッガー『眠りのケン』 - シナリオ

良かったのにな  
市街地 依頼先付近（昼）  
ドリームウェア社から立ち去る山田  
山田「手を目の前にかざして」ちえっ、朝日  
が目にしみるぜ。徹夜明けにはつらいな  
山田の携帯電話が鳴る。慌てて電話に出  
て、何かを話しだす  
林（オオ）「部長、ところであいつ、山田って、  
一体何者なんですか？」  
篠原（オオ）「フリーの仕事人さ。聞いたこと  
無いか？ 伝説のデバッガーの話」  
林（オオ）「伝説の？ あ、聞いたことあります。  
確か、あちこちの火を噴いたプロジェクト  
を渡り歩いて、見事に解決してしまおうと言  
う」  
篠原（オオ）「そうそれだ」  
林（オオ）「そして、寝ている間に仕  
事を済ませてもらおうか」  
篠原（オオ）「そう。そこで、ついたあだ  
名が」  
林、篠原（オオ）「眠りのケン」  
山田、電話を切つて、携帯をしまつてか  
ら、伸びをしして  
山田「じゃ、もう一踏ん張り、いきますか」  
【おわり】